

いいたが 放題

長崎市長

田上富久

Taue Tomihisa

「交流」の運命

長崎は、一五七〇(元龜元)年にポルトガルの船のために港を開くことになり、今の県庁あたりに六つの町をつくったところから歴史の表舞台に登場する。

その後の出島、唐人屋敷、居留地、ロシア艦船の避寒地、上海航路……という流れを見るとき、長崎開港の時点で、「交流」の二文字がこのまちのアイデンティティとして運命付けられたことがわかる。

以前、オランダを訪れた際、アムステルダムを歩きながら、まちに拒否されていない心地よさを感じたことがあった。自由な土地柄のせいかもしれないが、交流のまちならではの、受け入れ上手、な市民性のためではないかと感じた。同じ空気が長崎にもある、と。

これは長崎の「強み」だと思う。ヨソ者や外国人をジロジロ見る、受け入れ下手、なまちも結構多いからである。

長い交流の歴史によって育まれてきたこの強みをどう活かすか、といえば、現代ではまず「観光」ということになるのだろう。「平和」を通じた交流も大きな要素だ。

江戸時代は、貿易であり、蘭学であったのだろうし、その以前はキリシタンであった時期もあった。時代によって求めるものは違っても、「交流」は変わらない長崎のアイデンティティなのである。

さて、この強みをどう活かすか。これから中国をはじめとする東アジアからの観光客が増えることも念頭に置きながら、長崎のこれからの「交流戦略」を練る必要があると思っている。

●プロフィール

田上富久(たうえとみひさ)

1956年長崎県五島市出身。1980年九州大学法学部卒業後、同年10月、長崎市役所入所。2002年4月に観光部観光振興課主幹となる。2004年4月企画部統計課課長を経て、2007年4月、長崎市長に就任。市長就任と同時に日本非核宣言自治体協議会会長、平和市長会議副会長、また、2007年5月から中核市市長会会長を兼任。

今こそ必要な「逆・長崎游学」

ところで、「強み」は、ややもすると「弱み」に転じることがある。

以前、歌手の小椋佳さんに長崎の印象を伺ったときのこと。小椋さんは「東京は大きく言うと関東文化圏の一部だし、大阪は関西文化圏の一部だけど、長崎は独特の長崎文化圏を持つてるまちですね」と答えてくれた。的を射た表現だなと感じたのを覚えている。

一方、福岡でNPOの中間支援団体を運営されている女性は、「諫早と長崎の間に

ある山を取ってしまいたい」と言う。九州各地で高まりつつある市民活動の熱が、長崎までなかなか伝わらないことをくやしがつての言葉だ。

日本の西端の閉鎖された都市という位置は、独特の文化を育むのに役立つたが、交流しなければ、「強み」ではなく「弱み」になる可能性がある、ということなのだと思う。

江戸時代は、多くの有為な若者たちが長崎に情報やモノを求めてやって来たが、私は今、出かけてよそのまちの情報を持って帰る「逆・長崎游学」が、このまちには必要なのだという気がしている。

今日のような変化の激しい時代は、お互いに学びあい、高めあうことが大きな力になる。もちろん、出かければ収穫があるというものでもない。しかし、游学に来た幕末の若者たちのような情熱と行動力、そして使命感があれば、役に立つヒントと出会う確率はかなり高くなる。場数を踏むと、そのヒントを生かしてオリジナルの「長崎方式」を生み出せるようになる。

百聞は一見にしかず。百聞は一体験にしかず。財政状況は厳しいが、職員にも先進都市に現場を見に出かけてほしいと思っている。

交流は、何も来てくれることを待つばかりではない。



「逆・長崎游学の ススメ」